

は し が き

現在、5歳児の就園率（保育所を含む）は全国で94%に達しております。このような状況をふまえて年ごとに幼年教育の重要性が強調されるとともに、幼稚園・小学校教育の連携について多くの関心もたれるようになりました。

臨時教育審議会の第三次答申では、就学前教育の章の中で「子どもの円滑な連続的成長を図るため小学校教育とのつながりを強化する」と述べ、教育課程審議会でも教育課程の編成について「幼稚園から高等学校までの教育を一貫したものとしてとらえ、幼稚園教育と小学校教育の関連を一層緊密にするとともに……」と一貫性を強調しています。これを受けて、このたびの小学校学習指導要領においては総則に「低学年においては、児童の実態等を考慮し、合科的な指導が十分できるようにすること」と記すとともに、生活科を新設するなど幼・小の関連を一層配慮するようになっていきます。

連携の必要性は以前から叫ばれていますが、現実には実践されにくい問題となっています。それは、幼・小教育の接点における教育課程の具体的様相が鮮明でなかったり、幼児、児童の発達課題からくる教育方法や教育観の違いなど、相互理解が不足のまま自分の立場からの発言に終わりがちになり、連携の糸口がみつげにくかったことなどが原因と考えられます。連携するには子どもの発達に即したふさわしい生活が展開できるような幼稚園や小学校の在り方を理解しあうことから始めなければならないと考えます。しかし、この理解しあうということは簡単なことではありません。

この報告書には、小学校教諭だった者が幼稚園教育の世界に入り幼稚園をどう理解していったかという体験が書かれています。研究報告と趣を異にしますが、幼稚園・小学校教育の内容や方法の違いや特色を、事例をあげながら比較しお互いの（特に幼稚園教育についての）理解を深め、連携の糸口をさぐるための資料を提供しようとするものです。

各位から、御一読いただき今後の教育活動に御活用いただきたいと存じます。

平成元年 3 月 25 日

新潟県立教育センター

所長 長谷川 武 雄